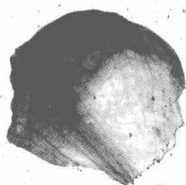




佐野洋子

*sano yōko*

右の心臓



# 右の心臓

*sano yōko*

佐野洋子

リポート

# 右の心臓

1988年10月29日第1刷発行

佐野洋子©——著者

小川道明——発行者

株式会社リプロポート——発行所

東京都豊島区南池袋2の23の2池袋パークサイドビル  
〒171 電話03-983-6191

明和印刷株式会社——印刷所

大口製本株式会社——製本所

佐野洋子(さのようこ)

絵本作家エッセイスト。

一九三八年北京生まれ。

武蔵野美術大学デザイン科卒。

一九六九年ベルリン造形大学でリトグラフを学ぶ。

絵本に「わたしのぼうし」「百万回生まれたね」。

エッセイ集に「私の猫たち許してほしい」「乙女ちゃん」。

8965-ISBN4-8457-0379-3 C0093 ¥1300F  
1988 Printed in Japan

右の心臓

装幀·菊地信義

试读结束：需要全本请在线购买：[www.ertongbook.com](http://www.ertongbook.com)

右の心臓







戦争が終つてからずっと父さんは内地の話をしてくれた。ごはんがすむと父さんはあぐらの中にタダシをすっぽり入れて、ヒロシと私は父さんにぐりと寄りかかつて、兄さんは、父さんの前にかしこまって坐つて、みんなシーンとして父さんの口を見ていた。

「何の話がいい」

と父さんはわたし達にきく。兄さんとわたしは、

「いなりずし、いなりずし」

と言う。北京にいた時兄さんとわたしはおいなりさんが大好きだったから、いなりずしがどんな形をしてどんな味がして、どんなにびかびか光っていたか知っていたけど、タダシは小さかったからいなりずしを知りもしないのに、やっぱり、

「いなりずし、いなりずし」

と言つた。

「内地のいなりずしは、とんでもなくてっかいぞ」

「どれ位」

「とんでもなくてっかいんだ。たたみ一帖位でっかいんだ。お前、そんなでっかいいなりずしがあったらどうする」

と父さんは兄さんにきく。

「はじからあうん、あうんって食べる」

「お前が一人で食っても食いきれるもんか」

「じゃあ、わたしもこっちはじからお兄ちゃんと一緒に食べられる？」

「あたり前だ。ヨーコがいくら食っても食いきれるもんじゃない。ヒロシもタダシも腹いっぱい食え」

ヒロシは体をゆらゆらゆらして、笑う。タダシは父さんのあぐらの中でおしりをびよんびよんさせる。

「もう腹がパンパンになって、お前から動けなくなるぞ、それでもいなりずしはまだ残っているぞ。どうする」

わたしと兄さんはにやにや顔を見合せて笑ってしまふ。口がずーっと横にひろがりっぱなしになる。

「中はちゃんと、白いごはんが入っているんだよね」

「あたり前だ、コーリヤンのいなりずしなんぞあるもんか」

「お父さん、お話して」

「何の話だ」

わたしと兄さんは又口を揃えて言う。

「いなりずし、いなりずし」

タダシは父さんのあぐらの中でおしりをびよんびよんさせる。

「今してやったばっかじゃないか」

「もう一回」

「よし、内地のいなりずしは、とんでもなくでっかいぞ」

「どの位」

……父さんは同じことをもう一回言ってくれる。それが終わると父さんは又きいてくれる。

「こんどは何の話だ」

「さつまいも」

「さつまいもなんか、はいてすてる程あるぞ」

「えーっ」

「父さんの家の庭にさつまいもがこーんなでっかい山になって置いてあるぞ。さつまいもなんか誰も食わない」

「誰も？　ぜーんぶさつまいもできている山？」

「あたり前だ。誰も食うもんか、食いあきてるんだ」

「うそだ、それ僕たち食べてもいいの」

「父さんの家のさつまいもだ。あたり前だろが。いくらでも食え」

「さつまいもだけ食べてもいいの」

「あたり前だ」

時々、母さんがさつまいもをふかしておやつにしてくれる時があったけど、黄色くてホクホクしているさつまいもは一人で二個食べられると夢みたいだった。ななめに切つてある黄色いところにお塩がポチポチ固まつてついていた。私は最初はべろでお塩をべろなめた。おいしい匂いとお塩が一緒にになるとただのお塩と全然ちがう味がした。それからちびちびはじから食べた。

「お兄ちゃん内地にいったら、さつまいもガブって食べる？」

「こーんなでっかい口あけてガブッ、ガブッ」

と言つて兄さんはわたしのうでにガブッとかみついた。

「やだア、お父さーん、お兄ちゃんかむ」

と言つてわたしも兄さんの足のところにかみついてやった。

それから父さんは柿の木の話もした。私の知っている柿は北京にいた時、冬になると、柿屋さんが車をひっぱつて売りに来る柿だけで、柿が木になることなんか考えたことがなかったから、柿が木になるのかとびっくりした。北京の冬の柿屋の柿はひらべったくて大きくてぐちぐちゆにじゅくして凍っていた。それを真二つに切つておさじですくつて食べた。しゃりしゃり凍っている柿をストープのそばで食べた。凍った柿が木になっているのだろうか。あんなまっ赤でびかびか光っているのがびっしり木になっているのだろうか。内地はきらきら光る竜宮城みたいところなのだ。

内地に帰つて来たら、父さんは今までの父さんみたいじゃなかった。

父さんより偉い人がいた。父さんの一番上の兄さんで、その人のことはみんなアブラヤのオッチャンと言っていた。

アブラヤのオッチャンはいつもいろいろの前に坐っていて、のどにたんがつまっているのか、ガガガアと咳ばらいを時々した。

ガガガアと咳ばらいをすると、伯母さんは台所からとんで来て、

「何ですか」

と言った。アブラヤのオッチャンが「ウツ」とあごをしゃくると、お茶を入れたり、眼鏡をさがしてわたしたりした。「ウツ」と言うだけで伯母さんは何でもわかるからわたしは感心した。ほとんど毎日伯父さんはいろいろの前でガガガアと言っていて、時々、洋服を着て、村の役所に行った。黒い帽子をかぶって、ステッキを持って、畑の中の道をいばりくさって歩いていった。歩きながらも、ガガガアと咳ばらいをするのがきこえた。

父さんは、やせていたけどわたしは今まで父さんがやせていても偉くないと思ったことなかったのに、伯父さんのそばに行く和家人みたいにへこへこして、にこにこ笑ってばっかいた。どこかよその人が来てよその人もへこへこして、アブラヤのオッチャンはガガガアと咳ばらいをした。よその人も、土間のところのあがりかまちに腰を下ろして、へこへこ話をして、あがりかまちでお茶をのんですぐ帰った。

おばあさんがいて、おばあさんは毎日、朝早くから畑へ行って畑仕事をして、腰がまがっているの

に一人で、こえおけをかついで、庭を何回も何回も行ったたり来たしたりした。わたしと兄さんが庭で遊んでいると、

「どけ、どけ」

とどなった。わたしと兄さんはおばあさんが来るととびのいた。

本当にさつまいもが、土間に山になっていた。おばあさんは、

「このいもはな、カンジのいもだからな、お前らのものではないからな」

とわたしと兄さんにすごく低い声でしつかり言った。「カンジ」というのがアブラヤのオッチャンの名前で、長男だから、おばあさんもへこへこしていた。

父さんは六男だから、全然偉くなくて、時々、山へたぎぎを切りに行ったりした。たぎぎを切りに行く時は、お百姓さんと同じかっこうをしてももひきみたいに足がつまったズボンをはいて、わらざうりをはいて、しよいこにわらのひもの輪をぶらさげて、腰にナタをつけてしよいこをしょって行った。わたしは背広を着て、黒いカバンを持って革靴をはいている父さんが本当の父さんで、わらざうりをはいてしよいこをしょっている父さんは本当の父さんじゃないと思った。山へたぎぎをとりに行く父さんにおばあさんは、

「リイチ、ソダだけだぞ、枯れていても太い奴はカンジの木だからな」

とどなった。父さんはきこえないふりをしてにやにや笑っていた。

父さんが山に行く時、

「ヨーコお前も来るか」

と言ったので、

「うん」

と言つて、わたしは父さんとすぐ手をつないで行つた。

父さんの手はほねほねほねぼつていたけど、ひらべつたくてやわらかくて、ずっと手をつないでいると、ねちやねちや汗つぽくなつた。ねちやねちやしてくると、わたしは手をはなして、父さんの前を走つて横切つて、反対側の手をつなぎに行つた。何回もあち行つたりこち行つたりして手をつなぎかえて山の方に歩いて行つた。

村の中で、誰かに会うと父さんは、にこにこ笑つて、

「今日はいいあんばいなこつて」

と言つてあいさつをした。わたしは父さんが村の人の真似をしているけど似合わないと思つた。北京や大連の家に来た父さんの友達に、父さんは「こつた」なんてことば全然使わなかつた。それに父さんが誰かにへこへこしたこと見たこともなかつた。

私はどれ位高いところに来たか時々ふり返つて見た。アブラヤが一番下に見えて、アブラヤの屋根の下にすぐ富士川の水が見えた。アブラヤの庭から川の水は見えないのに、川原も川の形も全部見えるから不思議だなあと思つた。

アブラヤの納屋のところに柿の木があつたけど、葉っぱだけで、実なんかないなかつた。

もつとどんだんのぼって行くと、もう木ばっかで、村は見えなくなって、だんだんうす暗くなってひんやりして来た。父さんはどんだん山にのぼって行った。もう道なんかなくなって、そのへんの木とか草とかにしがみつかないと、のぼれなくなった。わたしと父さんは黙って一人ずつのぼった。時父さんは立ち止まってわたしの手をひっぱってくれた。父さんは、

「お前はここに待っていていろ」

と切り株のところで言つて、しよいこを下ろして、たきぎを集め始めた。わたしも、そのへんに落ちてゐる枯れた枝を集めて、父さんのところに持っていっていった。

父さんはわらのなわを地面にのぼして、その上に枯れた枝をそろえて置いた。わたしはせっせせせと枯れ枝をその上に置きに行った。父さんは、わたしの置いたのもつと上手にそろえた。そして小さい山ぐらいになると、ひざを枯れ木の山にぐいとのっけると、わらのなわで、ぎゅうとしばった。そして、わらのなわを、太い木の上ののっけて、なたでたたいて切った。スパツとなわが切れたのでわたしは感心した。わたしはスパツとなわが切れるのを見ると胸がすかっとするので、父さんが、枯れ枝をしぼる時は急いで父さんのそばに行つて、スパツと切れるのを見ていた。枯れ枝の束が三つ位になるともうそのへんに枯れ枝がなくなった。父さんは枯れ木の下の方の枝をなたで切り落とし始めた。

「お父さん、おばあさんが、太い木はオツチャンの木だつて言つてたよ」とわたしは心配になつて言つた。



「枝ならいいんだ」

と父さんは言つて枝を切り落とす。わたしはそれをひろつて、又、なわのところまで運んだ。そのうちに父さんはなわを持って、少しづつ遠くに行った。

「お前はここにいろ」と言われたから、わたしは切り株にすわつてじつとしていた。すごく静かで、時々、チーンと虫がとんでいる音がして、又すごく静かになった。切り株のところの皮がはがれそうになっていたので、はがしてみたら、ポロツとすぐとれて、茶色い粉が降つた。皮はすごくやわらかかつたので、小さくちぎるとすぐポロポロになつた。ポロポロになつたのを指でこすると茶色いメリケン粉みたいになつた。わたしはスカートをはいて、木の皮でどんどん指をこすり合わせて茶色い粉を作つた。指をかいでみると、いい匂いがした。私は切り株のまわりの皮をつぎつぎにはがして、一生懸命に粉を作つた。スカートの上にだんだん粉がたまつていって、もうはがす皮がなくなつた。指でつまんで粉の匂いをかいでみた。何かの匂いだけど何だかわからなくて、いつかかいだことがあるけどいつだかわからないみたいで、いらいらしたけど、すごくいい気持ちの匂いだった。父さんにたまった粉見せてあげようと思つて、見まわしたら、父さんはどこにも見えなかつた。しーんとしていて木ばつかで木の向うは暗かつた。わたしはじつと動かないで、耳をすました。耳の穴の真中を固くしてどつかで父さんがさごそ動いている音がしないかと思つたけど、しーんとしていた。木の皮をむしっているうちに父さんどっかに行つちやつたんだ。父さんを呼ぼうと思つて立ち上がったら木の粉は全部落ちていって、スカートに汚れたみたいに茶色い筋がついた。わたしはそこで動かないま